

# 「支援の輪を広げる～松山市～」



『復興アクションチームえひめ』実行委員会代表

## 梅 林 良 一

東北から遠く離れた愛媛で今回の震災の教訓を人々に浸透させるにはどうすれば良いのか。被災地が抱える課題を知り、支援のあり方を考えるイベントを松山市内で開いている『復興アクションチームえひめ』実行委員会代表、梅林良一さん（42）に話を聞きました。

愛媛県は長らく“地震空白域”といわれていた地域です。しかし、江戸年間に3度、近年では2001年にマグニチュード7級の地震が起きています。また、近い将来、高い確率で東南海・南海地震が起こることも予想されており、地震の危険がないとは言い切れません。

また、伊方には四国の電力の4割以上を供給する原子力発電所があります。もし、マグニチュード7級の地震が起きれば、福島のような事態に陥る可能性がないとも言えません。

### 震災を知る・考える・行動する

震災から2か月が経過した5月11日。松山市内にある大街道商店街で、『震災を知る・考える・行動する』をテーマにイベントが開かれた。同商店街の梅林良一さんから市民有志『復興アクションチームえひめ』の取り組みだ。「政府や公共団体といったレベルでやることと、僕たちのような有志でやれることとって違うし、役割もあるだろうと。松山は今回の地震で被災していません。だから、震災について声を挙げている方々と松山の方々をつなぐ。声を挙げている人って、自分たちの輪を広げたがっているんですね。ただ、輪を広げる手段は少ないと思う。だから、イベントはそのハブになれば」と梅林さんはいう。

テーマも毎回変わり、パネリストも学生ボランティアだったり、救命活動にあたった赤十字のスタッフだったり、被災された方だったり様々。場所も市民が往来する大街道商店街のなかで行われているため、ショッピングがてら、ふらりと立ち寄れるようになっていいる。とはいえ、「100人いたら数人止まるかという感じ。反応はそんなにない」と梅林さん。「エンターテインメントでない限り、それは難しいと思うんですが、でも当たり前だと思ふ。目的意識のないところではなかなか芽生えないと思ふんです」。

こんな報告がある。「東日本大震災発生時、愛媛県でも宇和海沿岸に津波警報が発令され、沿岸5市町にも避難勧告が出されていたにもかかわらず、対象住民のわずか3.7%しか避難しなかった」。2001年の地震でも津波は発生せず、愛媛県での死者は1人。今回の地震でも揺れすら感



「生きてます」の文字

じられなかったことを考えると致し方ないところか。しかし、梅林さんは「震災後は献血をする人が多くなったりしていたから、何かを感じている方は多い。ちよつと違うアプローチをかけていけば、その役割は果たせる」と前を向く。

### 徐々に実感した震災の『リアル』

地震が起きた当日、梅林さんは大街道にある自身のカフェで働いていた。当然、揺れも体感しなかったので仕事は通常通り。知り合いから「半端ない規模の地震があった」という情報は入ってきたが、テレビで確認することはなかった。地震の実態を知ったのは、その日の夜遅く。「すごいことになってて…。でも、最初は実感がないわけですよ。死者や行方不明者の数だって1000人とか2000人とか聞いても、実感がたいわけですよ。落ち着いて見られない、整理がつかない、そんな感じだった」。

### 震災からおよそ一か月半後。

梅林さんは被災地への支援とイベントのネットワークを作るために石巻市大街道おおかいどうを訪れたとき、その『非現実感』を改めて実感する。「テレビを見てて非現実感を味わうのと、現場に行って非現実感を味わうのと余り変わらなかった。焼け野原のようになった場所を車でバアーツって通っても現実感が沸かない。映画

のセットのなかを通っている感じなんです。いうなれば浮遊感があるんですよね」。

梅林さんが、そんな風景をリアルだったと感じるようになったのは、松山に帰ってきてからのことだったという。「自分が撮った写真を前にして、イベントに参加してくれた人に伝えていると、ようやく『現実だった』と実感できたんです。たとえば、ガラスの窓に泥で『生きてます』って



いう文字。あるいは、全国から寄せられた花の植木。埃をかぶって崩れているところに、そういった光景があるわけです。あるいは、在海外で飛行機から降り立つと感じる、その国特有のにおいとかあるじゃないですか。石巻は言い方悪いですが、ドブ、泥のにおい。私の被災地での滞在時間は短かったから、その時は捉えきれなかったんだけど、外に出て初めて、リアルになったんです。伝えるという作業は、自らのなかで事象を昇華させる手助けをしてくれるのかもしれない。さらに梅林さんは心の動きをこう表現した。「深くて強いもの、深すぎて強すぎるものは、咀嚼できない。だからじわじわと、長くかかるかも知れないけど、深く強く、心に落ちていくんだと思うんですよ。深く強くっていうのは長く人々の心を引き張るんですよ。戦争っていうことが、日本人の心に深く残っているのと同じように、今回の震災も深く引張る。震災以降は以前と比べて、人の考え方とか、エネルギー政策とか、すべての転換点になっている。そういったことを深く長く考えさせるのが、今

回の3・11ですよね」。

テレビは生活に影響を与えるか

震災直後、梅林さんはテレビをつけて情報を得ることをしなかった。仕事中ということもあったが、そこには普段の視聴習慣があった。「テレビはリアルタイムでほとんど見ていないんです。全部、録画。だから、パッと見て面白くないなと思ったら、すぐ消しちゃう。ニュースですらオンタイムでは見ないですね」。幼少期からテレビはあまり見ていなかったのかと尋ねると、「価値観形成にまでは至らないものの、テレビの存在は大きかった」と梅林さん。「鉄腕アトムとかアニメは見ていました。ただ、自由にテレビを見られる環境ではなかった。親がチャンネル権を



『震災を知る・考える・行動する』のステージに立つ梅林さん（右）

持っていましたから。たとえば、親が『8時だよ！全員集合』が好きだったから『オレたちひょうきん族』はまったく見られなかった。だから、友だちの会話についていけなかったんです」と苦笑い。中学・高校になると自然とテレビから離れてしまったが、大人になるにつれ、その時その時に興味のあるものは見るようになったという。「いまは『美の壺』。仕事でギャラリ

すね。この前の大河ドラマ『龍馬伝』も初めて全部録画して見ました。あとはやっぱり、NHKスペシャルとか。すごい調査力だし、番組としての質も高い」。

実は大のNHKシンパで民放は見ないというほどの梅林さん。震災が起きる一年前にシリーズで放送されたNHKスペシャル『MEGAQUAKE 巨大地震』もご覧になったという。そんな梅林さんに、減災・防災報道は役だっているかと問うと、こう答えてくれた。「メガクエイクを見たからといって、防災意識を生活に取り込もうとする人はいないとは言わないが、少ないと思う。まず、自分には起こらないと思うだろうし、あったらあったで運命かと思う気持ちも否定できない。それは人の性の面でもあるので、それは仕方ないと思う。私自身も独身なので周りに迷惑がかからないくらいの備えをするぐらいにしか考えていない。でも、警笛を鳴らし続けることは必要だし、そういう社会的責任を果たせるのがNHK」。

では、震災が発生したときの放送はどう感じたのだろうか。これに対し、梅林さんは「もう少し力を抜いても……」という。倫理的な判断を随所でくだし、非常に気を遣っているのが視聴者にまで伝わってしまったら、非常に感じたからだ。「情報は100人いれば100人の受け止め方がある。どんなに気を遣っても、抗議する人は出てくる。だから、だれに向けて発信しているというところがはっきりしていれば、それで良いんじゃないのかな」。

震災はマスコミの情報のとらえ方を変えた

今回の震災報道には『発表報道ばかりだった』という批判がある。特に福島原発報道では『メルトダウンしていない』『格

納容器も圧力容器も健全』あるいは、『人体にただちに影響はない』という主旨の政府からの発表の報道が相次いだ。結果を見れば『メルトダウン』は起きており、『格納容器も圧力容器も健全ではなかった』わけで、放射線被害に関しては、いまでも、どこまで人体に影響を及ぼすかは結論が出ていない。そうした報道に晒された結果、梅林さんは「いままでよりも報道に懐疑的になった」。その結果、きちんとした判断をするための素地を作ることに傾注するようになったという。「地震のときに、携帯電話をを用意するとかという情報も大事だけど、報道の裏に隠された真実を考えることが大切だと思う。それはもしかしたら、もっと全体的な課題を考えることかもしれない。今回の報道で普段は考えなかったエネルギー政策について、どうあるべきか考えるようになった。たとえば、原発がダメなら、自然エネルギーをどうするのかとか、原発を継続するなら放射線というものも、どうすれば子孫に預けていくことができるだろうか、とか。結局、いまのエネルギー政策は、現代の人が潤うために、もっといえば、いまの権力者が潤うためにあるんじゃないかとか。そういったことを、いろいろな事実を付き合わせて、本質を見極めたい、そういう風に思うようになりましたね」。

報告 中央組織部長 竹内哲哉